

## ユニット3：ラーマヤナの主要登場人物の紹介とあらすじ (ver 1.2)

### 概要

ラーマヤナ Rāmāyaṇa. Rāma+ayana 「ラーマ王子の事績」の意。ヴァールミーキ作とされるサンスクリット語全7編(2万4千詩節)が標準的なテキストとされるが、インド・東南アジアに無数のテキストが存在する。原型は前2世紀頃に成立、2世紀頃に現在の形が完成。ラーマをヴィシュヌ神の転生とする設定や第7編は後期に付加されたと推測されている。

物語(ストーリー)はトレター・ユガの時代に設定されている。ラーマ王子はヴィシュヌ神の7番めの転生とされる。パラシュラーマは同じく6番目の転生。ラーマの昇天をもってトレター・ユガが終わり、ドヴァーパラ・ユガが始まる。

物語は、ヴァールミーキ仙がラーマの二人の息子たちに父ラーマの事績として詠って聞かせたものを、息子たちが記憶し、ラーマ王の前で詠唱したものであると第7編の中で説明。

### 登場人物(登場順と血縁関係による。読みはサンスクリットによる。)

ダシャラタ Daśaratha	コーサラ国の王。ラーマの父。
ラーマ Rāma	コーサラ国の王子。ダシャラタ王とその第1カウサリヤーの息子。
バラタ Bharata	ラーマの弟。第2王妃カイケーイー妃の息子。
ラクシュマナ Lakṣmaṇa	ラーマの弟。第3王妃スミトラー妃の息子。シャトルグナと双子。
シャトルグナ Śatrughna	ラーマの弟。第3王妃スミトラー妃の息子。ラクシュマナと双子。
ヴィシュヴァーミトラ Viśvāmitra	聖仙(ルシ)。ラーマの師。
ジャナカ王 Janaka	ヴィデーハ国の王。シーターの父。
シーター Sītā	ヴィデーハ国の王女。ジャナカ王の娘。
パラシュラーマ	「斧を持ったラーマ」の意。クシャトリヤに復讐するバラモン戦士。
ラーヴァナ Rāvaṇa	ランカー島(スリランカ)の羅刹(Rakṣas)の王。十面二十臂。別名ダシャムカ(Daśamukha 十の顔)ダシャカナンタ(Daśakanṭha 十の首)
シュールパナカー Śūrpanakhā	ラーヴァナの妹。羅刹。
ヴィビーシャナ Vibhīṣana	ラーヴァナの弟。羅刹
クンバカルナ Kumbhakarna	ラーヴァナの弟。羅刹。
インドラジット Indrajit	ラーヴァナの息子。羅刹。
ヴァーリン Vālin	キシュキンダーの猿の王。スグリーヴァの兄。
スグリーヴァ Sugrīva	ヴァーリンの弟。
ハヌマーン Hanumān	スグリーヴァの配下の猿の大將。
ヴァールミーキ Vālmīki	仙人。『ラーマヤナ』の作者。
クシャ Kuśa	ラーマとシーターの息子。ラヴァと双子。
ラヴァ Lava	ラーマとシーターの息子。クシャと双子。
ジャターユス Jatāyus	秃鷹。ジャナカ王の友。
アグニ Agni	火神。

### あらすじ

#### 第1編「少年の巻」

コーサラ国王ダシャラタはヴィシュヌ神の化身であるラーマなど4人の王子を得た(カウサリヤー妃からラーマ、カイケーイー妃からバラタ、スミトラー妃からラクシュマナとシャトルグナ)。ヴィシュヴァーミトラ仙の薫陶を受けたラーマは、ジャナカ王の宮廷で開かれた婿選びの競技で優勝し、王女シーターと結婚する。ラーマはパラシュラーマを打ち負かす。

#### 第2編「アヨーディヤーの巻」

ダシャラタ王はラーマに王位を譲ろうとするが、カイケーイー妃の干渉にあって、バラタを王位につけること、ラーマを14年間森に追放することを余儀なくされる。ラーマは父の命にしたがい、シーター妃とラクシュマナに伴われてアヨーディヤーの都を出るが、残された王は悲しみの余り絶命する。バラタはラーマを引き戻そうとするが拒絶され、ラーマから譲り受けた履き物を王座に置いてラーマの代理として統治する。

#### 第3編「森林の巻」

ラーマたちは行者たちを邪魔する羅刹たちの退治に活躍する。シュールパナカーはラーマに懸想して拒絶されラクシュマナからは侮辱を受ける。彼女は復讐のため兄ラーヴァナにシーターをさらって妻にするようそそのかす。小鹿を使った奸計でシーターを誘拐したラーヴァナは、シーターを救おうとしたジャターユスを倒し、ランカー島に帰還する。失踪したシーターを探すラーマたちはキシュキンダーでスグリーヴァとその家来の猿たちに出会う。

#### 第4編「キシュキンダーの巻」

ラーマはスグリーヴァが兄ヴァーリンから王国と妻を取り戻すのを手伝い、代わりにスグリーヴァの部下たちにシーター探索の援助をうける。ハヌマーンはランカー島にシーターが誘拐されたことを突き止める。

#### 第5編「美しい巻」

ハヌマーンは海を飛び越えてランカー島へ渡り、シーターと接触し、ラーマの指輪を渡して救出が近いことを知らせる。ハヌマーンは羅刹たちに捕まるが、ラーヴァナの宮廷を火の海にしてラーマのもとに帰還する。

#### 第6編「戦闘の巻」

ラーマたちは猿たちの力によって海に橋を架けてランカー島に攻め込む。ヴィビーシャナは兄を諫めるが聞き入れられず、ラーマに協力する。激しい戦いの末、ラーマはラーヴァナを倒し、ヴィビーシャナを王位につける。ラーマに貞操を疑われたシーターは火の中に身を投じるが、火神アグニが現れてシーターの潔白を証明する。一行はアヨーディヤーへ凱旋し、ラーマは王位につく。

#### 第7編「最後の巻」

国民の間にシーターの貞操を疑う声が生じ、ラーマはシーターを森に追放する。シーターはヴァールミーキ仙の庵に滞在し、クシャとラヴァの双子を産む。ヴァールミーキ仙は二人に『ラーマヤナ』を語って聞かせる。二人が物語を朗詠するのを聞いたラーマは、シーターに身の潔白を証明するよう求める。シーターが大地の女神を呼び出すと、女神はシーターを抱いて地中に消える。嘆き悲しむラーマは王位をクシャとラヴァに譲り、天界に昇ってヴィシュヌ神に戻った。

#### 参考文献

- 青山亨 1994 「ラーマ、ラーヴァナ、ハヌマーン—ポリフォニーとしての叙事詩とその英雄たち」『しにか』1月号. 5 (1): 62-67.
- 青山亨 1998 「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承」『ラーマヤナの宇宙：伝承と民族造形』金子量重・坂田貞二・鈴木正崇・編. 春秋社.
- 青山亨 近刊予定「プランバナン寺院シヴァ堂のラーマヤナ浮彫」『画像史料論（仮題）』東京外国語大学出版会.
- 阿部知二・訳 1966 『ヴァールミーキ ラーマヤナ』（世界文学全集 III-2）東京：河出書房.
- 石井米雄・他編 1991 『インドネシアの事典』京都：同朋舎. とくに「ジャワ文学」「ラマ」「ラマヤナ」「ラワナ」「ワヤン」の項目.
- 岩本裕 1980 『ラーマヤナ』第1巻. 東京：平凡社. とくに解題.
- 岩本裕 1985 『ラーマヤナ』第2巻. 東京：平凡社. とくに解題.
- 河田清史 1971 『ラーマヤナ』（レグルス文庫）全2巻. 東京：第三文明社.
- 松本亮 1982 『ワヤン人形図鑑』東京：めこん.
- 松本亮 1993 『ラーマヤナの夕映え』東京：八幡山書房.
- 松本亮 1994 『ワヤンを楽しむ』東京：めこん.



ジャワのワヤン人形：左からラーマ、ハヌマーン、ラーヴァナ、シーター。